

## A群溶血性レンサ球菌のT型別について (病原体サーベイランスのまとめ)

A群溶血性レンサ球菌感染症は、五類感染症(劇症型溶血性レンサ球菌感染症は全数把握疾患、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は小児科定点把握疾患)の対象疾患であり、また病原体サーベイランスの対象となる疾患になっています。これら疾患の起因菌は、*Streptococcus pyogenes* であり、劇症型は手足の筋肉等の軟部組織に壊死性の炎症を伴う重篤な症状を呈します。咽頭炎は主に小児に多く見られ、その他に扁桃炎や猩紅熱、続発症として急性糸球体腎炎、リウマチ熱等を発症することがあります。

当所では、病原体サーベイランス事業として小児科定点から送付された咽頭炎症状患者の咽頭ぬぐい液からA群溶血性レンサ球菌の分離をおこない、分離された株についてその疫学的指標であるT型別\*をおこなっています。

今回は2011年1月から12月までの1年間に分離されたA群溶血性レンサ球菌のT型別\* 結果を報告します。2011年1月から12月に受付けた86検体から分離された株は計54株で、TB3264型、T1型、T12型、T28型の順で多く見られました(表)。

TB3264型は、全国的にも2010年から分離比率が上昇した血清型であり、2011年もその流行が続いていたと思われました。

これらの結果は、衛生微生物技術協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンターに報告しており、全国のデータがまとめられて国立感染症研究所のホームページで報告されます<sup>1)</sup>。

表 病原体サーベイランス検体から分離されたA群溶血性レンサ球菌のT型別結果

菌型	T1	T3	T4	T12	T25	T28	TB3264	型別不能	計
2011年1～12月	8	4	5	7	2	7	19	2	54

\* T型別とは、A群溶血性レンサ球菌の菌体表層に存在するT蛋白の血清型別のことで、疫学調査の手段として広く用いられています。

<sup>1)</sup> 国立感染症研究所 第32回衛生微生物技術協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンター会議資料  
<http://idsc.nih.go.jp/pathogen/refer/str2010-1.pdf>

【 検査研究課 細菌担当 】